



定住外国人子ども奨学金 News Letter

※定住外国人子ども奨学金ニュースレターWeb版は個人情報などの都合上、内容を一部変更しています。

「私の進路選択」

奨学生たちの進路選択の参考にと、8月9日（日）大学生、大学院生、社会人2年目の3名の方にお越しいただき、どういうふうに大学や学部を選択したのか、進学した学部でどんなことを勉強したのか／しているのか、どんな職業についたのかという話をさせていただきました。以下は、その時に話をしてくれた新ボランティアの方の自己紹介とその報告です。

私は現在、K大学の博士課程に在籍しています。自分自身の研究関心から、奨学金の事務、KFCで学習支援のボランティアをさせて頂いています。今回、「進路選択」というテーマで、大学院進学の間経緯をお話させていただきました。

私は高校生のときから、「発展途上国」と呼ばれる国に関心がありました。大学に入学してすぐに、実際にそうした国を見てみたいと思えばベトナムを訪れました。ベトナムは経済発展が著しく、人々の間にある大きな経済格差が社会問題となっていました。その格差の影響は、様々な領域にまで及んでおり、不就学など子どもの教育格差もその1つでした。実際に、そうした教育格差を間近で見て、学校に行く子どもとそうでない子どもの違いは何なのか、という疑問をもつようになりました。

大学3年生の進路選択の時期になり、私は大学院への進学を決意しました。きっかけはベトナムを訪れて生まれたもやもやした疑問です。一方で、大学の友人たちは就職という進路を選択していました。多くの人と異なる道を選択したことで、少なからず不安がありました。学費などの経済的なこと、大学院卒業後の就職のことなどです。文系で大学院へ進学する人はまだまだ少数で、友人たちからは驚かれ、就職を考えて反対されたことを覚えています。しかし、自分のしたいこと、できることを考え選択した結果なので、今は充実した大学院生活を送っています。「来期の学費は大丈夫だろうか？」など不安材料は後を絶ちませんが、自分が何をしたいのか、そして、それはできる範囲内のことなのかをよく考え、選んだことなので、いままも前向きに頑張っています。

自己紹介のあと、奨学生からの次のような相談を受けました。「進路選択において入ってくる情報が様々で、どれを信じればよいのか分からない。」というものです。たしかに、進路選択において、学校の先生の言うこと、塾の先生の言うこと、ウェブ上に載っている情報は必ずしも一致するとは限りません。それらの情報が正しいのか、間違っているのかの判断はとても難しいかと思えます。仮に正しかったとしても、かなり偏った情報かもしれません。しかし、何も知らない状態では前進することができません。まずは、そうした様々な情報を得ることも重要ではないでしょうか。 (事務局ボランティア O.N.)

奨学生からのメッセージ

新奨学生からは主に学校生活について、他の奨学生には自分でテーマを決めて作文を書いてもりました。

Kさん (8期生)

「高校生活と進学について」

僕は高校に入学して驚いた事があります。それは、入学して数か月で大学進学や就職のことを考え始めなければいけないことです。そのため、2年次には文系・理系・文理型に分かれ、自分の将来目指す進路先を決めていきます。僕は幼い頃から教師を志望しているので、文理型を選択しています。

高校の授業は中学とは違い内容が難しいので、きちんと予習、復習をしておかなければ授業に追いつけません。この夏休みの間は1学期の復習と夏休みの課題をしっかりとて、2学期に向けて頑張りたいと思います。そして、部活は吹奏楽部に入っているの、夏はコンクールや催し物が沢山あり、なかなか勉強が前に進みません。でも、友人との時間もやはり大切にしたいので、勉強の時間と遊ぶ時間をきっちり決めて有意義な夏休みにします。

7月19日に兵庫教育大学のオープンキャンパスに行きました。ホームページでは分からなかった学内の雰囲気や学生達の日常、大学ならではの特色や入試体験談を先生と在学生から聞くことが出来ました。

今年は兵庫教育大学を含む5つの大学のオープンキャンパスに参加して、各大学独自の特色や魅力を見極め、来年度のオープンキャンパスの参考にしていきたいです。

中学の時には、おおまかにしか考えていなかった「教師」という将来の夢も高校に入ると現実味をおびてきたので、正直自分の中はかなり悩みが出てきています。国籍の問題もあり、教諭扱いではなく常勤講師扱いとなるみたいなので、管理職になるためには、国籍変更も考えなければいけないのかと思っています。高校に入って、自分はかなり大きな決断を迫られている気がして不安になります。ですが、まだまだ知らない事がたくさんあるし、知らなければいけないこともあるので、先輩や先生、奨学金事務局の方々に助けてもらいながら、不安を取り除き成長していきたいです。

Bさん (8期生)

「学校生活について」

僕は中学1年生になった時、何もわからずに毎日過ごしていました。小学校の頃と違い、勉強の大切さを理解できるようになったのは、中学2年生の頃だと思います。小学校と中学校の大きな違いはテストだとも思います。小学生の頃はテストの点をあまり気にしていませんでした。担任の先生が「テストが返されたらそのテストをファイルに入れて、見直せるようにしておきなさい」と言っていましたが、その頃は意味が分かりませんでした。中学1年生の時も、小学生のような考えで宿題はしてもそれ以上勉強をあまりしませんでした。ですが、勉強を教えてくださいました学校の先生やボランティアの方々のおかげで中学2年生の頃には、英語や数学が好きになり、苦手な社会も良い点を取れるようになりました。たくさんの方々の支えのおかげで無事 Y 高

校に入学することができました。

高校生になって、中学生の頃からしていればよかったと思うことがいくつかあります。

1 つ目は英語です。中学生の頃から英語は 1 日 1 ページしていましたが練習不足だった気がします。中学 3 年生になるまでは、英語のノートに単語の練習ばかりしてしていました。教科書の本文を何度も書いて、日本語に訳してという練習をしていれば、中学の 3 年間でものすごく英語は上達していたと思います。高校だけでなく大学や大人になっても仕事で英語を使う機会があります。僕はいろんな国の方々とお話をしてその国の文化に触れてみたいと考えています。高校生になって英語はますます難しくなりましたが、努力を積み重ねていきます。

2 つ目は運動です。僕は小学生の頃は外でサッカーや野球をして、家ではみんなでゲームをしていました。しかし、中学生になって外で遊ぶことが減ってしまい、部活動も運動部ではなかったので、体育のテストで 98 点を取っても、実技が悪いのでなかなか 5 を取ることができませんでした。

高校生になったからには、自分のしていなかったことに積極的に取り組んでいきます。毎朝 5 時に起きて走ったり、英語だけでなく日本語（古典）・中国語・ベトナム語・ポルトガル語など様々な国の言葉や文化について調べていこうと思います。

僕の卒業後の目標は学者になり、今の日本の技術の発展に貢献したいと考えております。

もう 1 つ、日本や母国などの昔から受け継がれてきた技術（伝統的な物）を今の人達に伝えていきたいです。

まだまだ未熟者ですが応援よろしくお願いします。

D さん（8 期生）

「学校生活について」

今年の 4 月から、中学校 2 年生からずっと入りたかった高校に通い始めました。私は中学校 1 年生のときに、すごく人見知りしてしまい、最初はぜんぜんお友達ができませんでした。そのため私は高校生になったらもう人見知りをしないと決めていました。入学式の日、みんな緊張している中で、私は勇気を出して、周りにいた子に声をかけました。おかげで、高校に入ってすぐに、友達がいっぱいできました。また中学校のときは、パソコン部であまり活躍していなかったため、高校に入ったら、運動部に入ると決めました。だから、私はカヌー部に入りました。めずらしい部活だったし、インターハイなどもめざせるので興味をもって入りました。練習は思ったよりきつくて、家も遠いので、なかなか大変だけど、友達がたくさんできたとし、男女の仲が良いし、先輩も優しいし、かつこいいし、すごくフォローしてくれます。そして、何より部活が楽しいので、がんばれます。

高校に入って、部活に入って、びっくりするぐらい自分が変わったと思います。もう中学校のときのめんどくさがり屋で逃げてばかりの自分には戻りたくないです。今は、本当に高校生活が充実していて、楽しいです。家が遠いため、部活をしていたら、家に帰宅するのは、夜の 9 時くらいになります。しかし、その分、宿題や勉強をコツコツするようになり、だらだらと過ごす時間が減りました。

これからの目標は部活と勉強の両立をすることです。部活でつかれて、そのまま勉強もせずに寝てしまう日もあるため、朝、早起きして勉強したり、電車の中で勉強したいと思います。夏休みに 1 学期の復習をしたいと思います。夏合宿や 1 日練習で、なかなかきつい練習は続くと思

ますが、途中であきらめず、最後までがんばって、できるだけ弱音を吐かないようにしたいです。そして、1 日 1 日の練習を大事にして、今日の目標を決めて、そして終わったあとに、ちゃんと反省や感想を部誌に記録したいです。勉強も部活も大事だけど、友だちと遊びたいです。せっかくの夏休みなので、計画をちゃんと立てて、楽しい、充実した夏休みを過ごしたいです。

I さん (7 期生)

「モチベーションのある夏」

現在、私は高校 2 年生として勉強・バスケットボールのクラブ活動と、高校生活を楽しんでいます。

帰国子女として、帰国時は日本語に不安がありました。新聞を読んだりして自分でも努力しましたが、KFC の先生方や、その他の学校の先生方など、やはり、お世話になった先生方のお陰で K 高校に入学できた事を感謝しております。

今では会話に、何ら問題は無くなりました。しかし、日本語の読み方は大変難しく、今でも多少、読解力に不安があります。試験で日本語の長文の問題が出ると、少し意味が理解出来ない部分もあり、問題が解けない事もあります。読解力が自分の今後の課題と考えています。

今年は学校の行事として、海外研修でイギリスへ行きますので、楽しみですが、大学受験の事を考えると不安で一杯です。

私の目標は医学部への進学です。

理由は、東日本大震災やネパール大震災の報道をみて、怪我をしている人が救出されているけれど、誰が手当をしているのだろうか？ 地元のお医者さんにも怪我している人が沢山いるだろうに、と書いていたのですが、ニュースで日本をはじめ、世界各国からの医療チームが現地に行って治療活動をしている事を知り、私も今後、誰かの、何かの役に立ちたいと思い医学部への進学を目標にしました。

今現在、母が 1 人で生活を支えてくれており、母の負担も考え、学費に加えて衣食住の負担も無い B 大学医学部を目指しています。先日、B 大学を訪問し、担当者の方から、B 大学の受験の事、その後の学校生活の事などを色々とお聞きし、パンフレットも頂いてきました。受験は来年ですが、自分自身のモチベーションを上げる為にも、7 月 23 日のオープンキャンパスに出席したいと考えております。埼玉県所沢市までの夜行バスでの往復ですが、何かを見つけ、何かを掴んで帰って来たいと思っています。

定住外国人子ども奨学金からも奨学金を頂いており、B 大学の過去問題集や参考書、模擬試験の問題集を購入したり、週 1 回の夜間英会話クラブの受講料に充てたりしており、大変ありがたく思っております。

また、学校から O 大学の SEEDS (科学技術の大樹を目指すプロジェクト) の参加にも推薦されて、参加出来る事になりました。

K 高校の代表として、恥ずかしく無い様に努めたいと思っています。

KFC にも沢山の生徒がいますが、OB として、強い信念と目的達成の為の意欲を持ち続け、今後も勉強していきます。

S さん (7 期生)**「現代の人々の生き方」**

現代の社会はここ数年で急速に発達し、お金があれば何不自由なく、生活しやすい世界となった。すなわち、生き易い世界である。しかし、それとともに生きにくい世界にも成りつつある。

近年、若者の間ではスマホが普及している。魔法のように指一本で操作でき、電話はもちろん映画までもが全てポケットサイズで即座に見ることができる。そんな便利なものが人間を虜にした。私はスマホを持っていない。だから、スマホを持たない人の目線で言うと電車や公共の場でスマホと向い合う人間の多さは異常である。

スマホは多様なものを見せてくれる。しかし、そのスマホを見る人間の表情は一様な「無」の表情だ。原因は文字でのやり取りでしかないことにある。文字が人から人に伝えられるものは全体の 3 割にも満たないと聞いたことがある。すなわち、表情や声の強弱など面と向かってしか伝えられないものが七割以上を占めるのだ。どれほどスマホが「繋がり」を設けてくれると言っても、それは 3 割未満の世界であり、薄く脆いものであることがよくわかる。自分の伝えるべきものの 7 割以上が伝わらないこの状況から人間関係の不の連鎖が始まるのだ。表情がなくなることで気持ちの表現力は鈍り、感受性が減り、最後には対人能力までもが侵される。人間はスマホの「繋がり」によって遠回りをして人との「繋がり」を失っているのだ。これらの連鎖によって人は生きにくいと感じるのだ。

私は思う。現代の超コンビニ化社会から離れて自然と触れ合うのはどうかと。過度に発達し、物事に対する感じ方の基準が変化してしまった今だからこそ、自然環境から学べること感じる人が多いはずだ。私は幼い頃から自然と触れ合うことが多かった。しかし、今では自然のある場所が減少し、寂しく思う。だから一層思うのだ。自然と触れ合うことで私達人間は自然の一部であることを改めて感じる必要があると。

J さん (7 期生)**「社会的平等への小さな一歩(進歩)」**

同性カップルに「結婚に相当する関係」を認める証明書の発行を盛り込んだ条例が成立した瞬間、30 歳である東小雪(元タカラジェンヌ)さんはパートナーの増原裕子さんの手をしっかりと握りしめ、喜びを噛みしめた。

2015 年 3 月 31 日、東京の渋谷区議会で採決が行われた。この条例は同性カップルに「パートナーシップ証明書」を発行し、賃貸住宅への入居や病院での緊急時の面会等の場面において、同性カップルを夫婦と同等に扱うよう求めるものだ。

このニュースは、自由民主党の政治家を含めた“保守的な考え方の人たち”による、数えきれないほどの論議を引き起こし、一部の活動家による抗議集会も開催された。

自由民主党の佐藤真理氏は、「そのような決定によって社会がさらに細分化していくことが懸念される」との趣旨の発言を行い、「われわれはこの問題に関してもっと時間をかけて話し合う必要がある」と強調している。

私は、メディアを通して上に述べた条例に関する話し合いがなされていることを知り、「今だ！日本！」という言葉が頭にふと浮かんだ。かなり若い世代の人たちの間で、性的少数者に関する問題が明らかになってきている。そこで、私はここ日本での性的少数者がもつ権利をかけた戦い

に関して“最近の”運動について書こうと決心した。しかし、そのことに関係する多くの記事を調べていくうちに、私が驚いたのは、1994 年に初めて公的に“Tokyo Lesbian and Gay Parade (TL&GP)”という同性愛者、両性愛者の国際機構、そして Intersex Association (ILGA) Japan によって主催された祭典が開催されたにも関わらず、自分がいかに 20 年以上前の運動に関して無知であったかということである。

なぜ私はすでに日本に存在していたこれらの活動について知らなかったのだろうか。我々は、西欧と比べてマイノリティに対して進歩的でない日本社会における固定概念をどのように考えるべきだろうか。

好奇心にあおられて、私は答えを探し始めた。wordpress.com のブログにはこういう記述がある。「Sponichi Annex によると、the Liberal Democratic Party of Japan (LDP) は 12 月 5 日、同性愛者の権利に賛成する NGO 団体による調査結果の中で、「性的少数者のための人権は守られる“必要がない”」と主張している。」

さらに、私はある調査結果を偶然見つけた。その調査結果は LGBT Families & Friends という、東京を拠点として性的少数者の認知度を高めるために活動している NGO 団体が行ったものであった。そこに示されているのは、日本にいる 50 人に 1 人は同性愛者かもしれないということである。つまり、約 260 万人が自分が同性愛者であることを公表しているのだ。この調査結果は LDP のかなりばかげた主張と反するものであった。このことによって示されているのは、我々がひょっとすると性的少数者に関する問題が存在しているのだという真実を無意識に無視してしまっているかもしれないということなのである。

最も重大な問題の一つに挙げられるのは、地域社会にいる膨大な若者人口への影響である。東京を拠点としている団体、命リスペクトホワイトリボンキャンペーン(Life Respect White Ribbon Campaign) によってネット上で 2013 年に行われた世論調査でわかったのは、日本にいる性的少数者のうち約 70% は学校で何らかの形でいじめを経験したことがあり、彼らのうち 30% は暴力を経験し、自殺を考えたことがあるということであった。私が恐ろしく思うのは、こういった生徒たちが守られる“必要がない”というレッテルを張られていたということである。

また、日本のビジネス雑誌によって行われた、共同社会責任に関する 2014 年の調査結果では 114、または日本で主要会社として名があげられる 607 社のうち、たった 18.7 社だけが LGBT(Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender)である従業員を守ろうと努力していることがわかった。虹色ダイバシティ(Rainbow Diversity)の設立者である村木真紀は「人に知られていない LGBT である従業員の中には、彼らをもつ性の考え方に対して同僚から軽蔑的な言葉を受けることによって、不快な気分になる者も多い」と述べている。

さらに徹底的に調査していくにつれ、私はこの運動が同性愛者の人権平等を主張していること、そしてこの運動が社会的平等に通じる社会的進展のための運動として考えられるべきだとの理解を深めることができた。しかし、この運動の中で、社会的理解の向上という目標は、ほんの少しの変化しか実現できていないと私は考える。私が指摘したい明確な事実は、この無知が性的少数者だけに当てはまるのではなくて、少数派としてレッテルが張られているほかの残りの社会階層にも影響を与えるということである。移住民である私は“少数派”と呼ばれる社会階層に属しているとみなされている。そこで私が気づくのは、どれだけ社会のレッテルが一人ひとりの多様性を深く傷つけるのかということである。私自身、自分は幸運で恵まれていると思っているのは、自分を受け入れてくれる環境に自分が住んでいるからだ。そこでは、私は公式に認められ仲間として受け入れられている。しかし、その多様な個性を承認されず、ばかにされ、そして権利を傷

つけられてしまう人もいるのだ。

人は、本来人類社会に備わっている多様性を考慮することなしに、一方的な価値観で判断されるべきではない。我々は社会的平等を抑圧するのではなく、受け入れるべきなのである。

Kさん (6 期生)

「我々は人類史上もっとも平和な時代を生きている。」

「我々は人類史上もっとも平和な時代を生きている。」と、心理学者のステイブン・ピンカーは言う。疑問を持つ人もいるかもしれないが、私は、当然そうであるべきだと思う。人というものは日々進歩していくものだ。昨日より今日、今日より明日がより平和であってほしいと願うのなら、人の言動はより平和になるはずだ。「はず」だ。しかし、私は、「今日が先週より平和か」と問われると、「そうではない」と答えざるを得ない。確かに、この 1 週間、世界で逮捕された犯罪者は多くいるだろう。しかし、脱獄した者もいる。その脱獄した者達の中で最も有名なのが、メキシコの麻薬王だろう。このニュースを見たとき、「麻薬王を逃がすなど、何と頭の悪い国であろう」と呆れた。数秒後に我が母国の話だと知り、言葉を失った。5 億円の賞金を懸けても見つかる確率は低いと思う。5 億円の賞金をもらって家族が皆殺しにされるか、口止め料をもらって日常生活を守るかの選択なのだ。こんな世の中のどこが平和なのであろうか。「その点、日本は平和な国だ。」と書いていられたのは、それもまた、先週までの話だ。安保法案の可決。「可決したからといって戦争しまくるわけではない」という人もいるかもしれないが、私が平和の危機を感じたのはその点ではない。可決したことより、可決の仕方が問題なのであると思う。日本中でアンケートをとって、安保法案の内容を正確に答えられる人は、どのくらいだろうか。私は、答えられる自信はない。投票権を 18 歳に引き下げようとしているのに「国民の理解がすすんでいない」ままでよいのだろうか。国民と国の距離が離れることとは、身近な平和（日常）を脅かすことだと、ギリシャを見て思う。悪いイメージが多い安保法案の可決だが、一つだけ日本に良い影響を与えていると思う。それは、国民が自分たちの意思を発したことである。学生運動の盛んなメキシコから来て、「日本人は、何て大人しいのだ。正直なところ日本がどうなってもいいと思っているのではないか。」と心配していたので、少し安心した。それと同時に自分の考えを発信することは平和に繋がるのではないかと思った。

たとえこの時代が人類史上最も平和な時代だとしても、完全に平和な時代ではない。完全な平和なんてないのかもしれないが、たとえそうだとしても、我々人間には、より平和な時代を求める権利と義務がある。今日より明日が平和であるために、自分にできることは何なのだろうか。

Nさん (6 期生)

「10 年後の自分」

将来、私の希望通りに教職に就くことができたと仮定すると、10 年後の自分は、大学で学んだことを教員になったばかりの頃よりも、発揮できているのではないだろうか。それでも、まだたくさんわからないところがあって、子どもたちと共に、成長していく日々だろう。

私は将来、数学の先生になりたいと思う。そう思ったのは、中学時代だった。担任の先生が数学の先生だったので、数学の成績のことについてうるさく言われていた。言われるのが嫌になったのか、数学に対する興味が湧いてきたのかはわからないが、授業が楽しく受けられるようにな

った。さらに、テストで良い点数が取れたことで、より好きになった。難しい問題を解けたときの喜びなどを経験しながら勉強していく中で、さまざまな楽しさが味わえる。したがって、数学に関しては、強制されている感覚が少なく、むしろ、自分からやりたいという思いで勉強してきた。しかし、友達の中で、「数学できない」「計算が面倒だ」「証明の仕方がわからない」「ミスが多い」などを言う人もいた。私が考える理想像は、数学の楽しさを少しでも多くの子どもたちに伝えるということである。勉強というのは、無理やりさせられるものではなくその中で、何か楽しさが見つければ、自然と身につくものであると考えている。さらに、知識を教えるだけではなく、子どもたちの 1 人ひとりの心をケアするのも教師の仕事の一部だと思う。現代社会で、様々な若者の問題が存在しており、どうすれば、学力はもちろん前向きな、明るい、勇気のある子どもを育てることができるかについて考えることが今後の 1 つの課題ではないだろうか。

私は、若者の問題を改善したいと思う。そして、教育現場で自分の力を発揮したいと思う。

Y さん (6 期生)

「計画」

台風の影響で終業式が中止となった夜、テレビで「時をかける少女」を見ました。高校三年生の夏、本格的な受験勉強が始まり、各々が進路を決めている時期設定だったこともあって親しみやすい中身でした。

ここでの主人公は過去に戻って夏を満喫したり、勉強して模試で良い点数を取ったりしました。自分がそうだったとしても、大学へ入れる自分であるように過去へ戻り、もっと勉強すると思います。しかし、何度でも過去へ戻れるならば、1 回は小学校 6 年生の、日本へ残るか、ペルーへ帰るかを家族で決断した日に戻り、ペルーに帰ると思います。小学校の頃は間違いを畏れて自信をもって話すことができなかつた引っこみ思案だったけれど、我慢強い自分がどう変わっていたかに多少の興味があるからです。

実は母の親しい友人で、2 組の家族がペルーに長期的に帰る予定です。両家族には小学校 6 年生の子どもがいて、片方は僕に似て、自分らしさを押し殺し、相手に合わせようとして自分を畏縮させます。もう 1 人は自己主張が強すぎて、友人がなかなか作れず学校にうまくなじめていません。

前者の家族は約 1 年ペルーへ帰り、日本へ戻って、子どもを国際学校へと通わせ、後者は、ペルーで子どもに日本語学習を続けさせ、可能なら日本の大学へと通わせるという大まかな予定を立てています。この 2 家族が口を揃えて言うのが、小学校から大学までの子どもの教育についての詳細が分からず、見通しが立たないまま子育てをする不安が大きいということです。

日本語に支障が無ければ別ですが、自国と教育制度から何までも異なる国での子育ては大変です。だからと言って、日本育ちの子どもを連れて国へ帰ってもうまくなじめないことも多く、日本へ帰ることもしばしばあります。子どもを精神的に疲れさせ、子どもの大切な時間だけを犠牲にするだけで本当に残念です。

やはり、計画って大事だと思います。この夏も計画を立てて、基礎を徹底的に身につけて、2 学期につなげる気持ちでやらないと後悔すると思います。平日は補習が前期、後期で 2 週間ずつあり、模試もこつこつと基礎力と実力を上げるチャンスが盛りだくさんです。この夏、強化したい教科、分野は大体分かっています。過去は変えられなくても、努力次第で自分の未来が変わります。この夏を乗り越えて、半年後、将来にとって意味のある期間にしたいです。

